

〔情 報〕

書 簿 紹 介

『チベット密教』田中公明著、春秋社、1993年4月

マンダラ展、チベットの死者の書、瞑想法の講習会など、われわれの周辺でチベット密教についての関心が急速に高まってきた。しかしながら、この分野での信頼に足る書物にはスタンの『チベットの文化』(岩波書店)、山口瑞鳳氏の『チベット』(東京大学出版会)、あるいは『チベットの言語と文化』(立川・長野編、冬樹社)など数えるほどしかなく、しかも、これらもチベット密教だけに焦点をあてたものではない。

このような状況で、格好の入門書『チベット密教』が気鋭の密教学者田中公明氏によって刊行された。著者自身の言葉を借りれば、本書はチベット密教に関する「最新の研究成果に基づく科学的、客観的情報を提供するもの」で、「わが国との相違点や歴史的な展開を含めた総合的で科学的なマニュアル」である。ややもするとオカルティズムやエゴゾティシズムのみが強調される類書とははっきりと立場を異にしている。

全体は歴史・人物篇、文献・教理篇、尊格・美術篇、儀礼・実践篇の四篇からなる。歴史・人物篇では、インド仏教史をふまえてチベット密教の歴史を略述した上で、ptonやツォンカパなどの重要な人物を五人選び、彼らの業績からチベット密教の特質を明らかにしている。文献・教理篇では、主要な密教經典を解説するとともに、チベット人による密教綱要書などをとりあげる。第3章の尊格・美術篇は筆者自身が最も得意とする領域であるが、他章に比べてもそのウェイトは必ずしも大きくなない。『曼荼羅イコノロジー』(平河出版社)などこの分野での著書がすでにあるため、他章とのバランスを考慮したのであろう。尊格の分類法、守護尊、マンダラ、ツォクシンの四項目にしぼって解説する。最後の儀礼・実践篇では、生起次第などの実践法と、灌頂・護摩といった密教儀礼をとりあげている。儀礼の解説ではインドの文献を情報源とするため、必ずしもチベットの密教儀礼の実態を伝えるものではないが、実践法での瞑想の内容の描写などは具体的でわかりやすい。

本書を一読して感じるのは、筆者が実に豊富な知識をそなえ、しかもよく調べていることである。二次文献に頼らず、原典を直接涉獵する態度は評価される。世界的にみても充分研究が進んでいるとは言い難い『時輪タントラ』や、ソナムツェモ(筆者の表記ではスーナムツェモ)の『ギューデ・チナム』、ツォンカパの『ガクリム』などのチベット人による重要な典籍も丹念に読んでいる。また歴史篇に収められた「各宗派の現況」は、現在のチベット密教のおかれている状況を端的に伝える。この種の情報はこれまで不足していたため貴重なものである。百点近い図版の多くを筆者自身

が提供していることともあわせて、現地調査を繰り返してきた筆者の強みであろう。特定のテーマを選び、手際よくまとめるスタイルは、全体がひとつの結論に収斂されることはないが、一般的の読者には取りくみやすい。(ただし、一般的の読者への配慮という点からいえば、『ガクリム』などのシノプシスを、本文中に説明があるとはいっても、原語で表記することには疑問がある。専門家は重宝するであろうが、訳語をあてた方が親切ではないか。)

概説書という性格上、筆者自身のもつチベット密教に対する視点がじゅうぶん伝わらないもどかしさもあるが、文章は平易でわかりやすく、豊富な知識を享受することができる。本格的なチベット密教の入門書を手にすることで喜びとしたい。

(森 雅秀 高野山大学密教文化研究所講師)

『インド・大地の讃歌——中世民衆文化とヒンディー文学』H. ドゥヴィヴェーディー著、坂田貞二・宮元啓一・橋本泰元訳、春秋社、1992年7月

我々日本人が“インド”という言葉から思い浮かべるイメージは、かなりパターン化しているのではないだろうか。仏教が生まれた国、ウパニシャッドなど難解な哲学を生み出した国、数学・天文学に優れた国、貧富の差が大きな国、不衛生な街、シタールの音色、サリーを着た婦人、極辛の料理、……。人それぞれにインドのイメージの描き方も異なるだろうが、それらは‘古典インド’を見ているのか、それとも‘現代インド’を見ているのかという、視点の置き場が時間的に異なるだけの二者に類別してしまうのである。そして、あたかも歴史の流れのどこかに見えない境界線が引かれているかのように、この両者間のギャップは意外に大きいのだ。仏蹟を巡る旅をして、その崇高さに感激すると同時にインドの民衆の生活を垣間見て、この歴史のギャップを感じる体験をされた方も少なくないであろう。

ここに紹介する『インド・大地の讃歌——中世民衆文化とヒンディー文学』は、そのギャップを埋めるための手だてを示してくれている点で画期的であり、我が国のインド研究に新風を吹き込んでいる。ヒンディー語原著初版が1940年であるから、邦訳はもっと早くなされてしかるべきだったが、本邦のインド研究の進度を顧慮すれば、今まさに機が熟したのだと言えよう。

上述したようなギャップは実はインド研究の学界において認められたところなのである。文化・思想史研究の土台となる文献学をそもそも分断するような言語事情がインドにあったことに起因している。つまり言語体系が異なることから、サンスクリット学者は古典のみを扱い、近現代諸語による文学作品等の資料はその専門学者が扱うという状況が強いられていたのである。しかし、言語体系の差異は時代で区切れるほど単純なものではない。サンスクリットによる哲学・宗教文献は今日に至るまで絶えず創作されているし、広い意味のヒンディー語（インドに多数ある民衆語のひと

編集後記 1993年のトピックは予期していたよりも早い政権交替のおとずれであろう。また、冷夏に苦しめられ、地震に見まわれ、米の不作による緊急輸入、深刻な不景気風の吹きはじめと激動のそして苦悩に満ちた一年であった。▼ゴータマ・ブッダは苦悩とはわれわれ凡夫の思いどおりにならないことと説かれた。まさに思いどおりにならない一年であった。▼それまでのわが国はつかのまの繁栄と好景気と消費に酔いしれた。物があふれ金があまるということは決して常態ではない。▼われわれはおごりたかぶってはならない。驕慢さを捨てて、謙虚さと堅実さにたちかえらねばならない。心を磨き、感性の豊かさをめざさねばならない。▼『東方』第9号が産ぶ声をあげた。本号の特集は「神道と仏教との対話」である。神仏という大いなるものに心をよせて、1994年を力強く生きようではないか。

(J.A.)

東方

第9号

平成5年12月27日印刷

平成5年12月31日発行

発行人 中村元

発行所 働東方研究会設立 東方学院

〒101 東京都千代田区外神田2-17-2

電話 03(3251)4081

振替 東京2-105515

編集・製作

東京書籍株式会社

東京都北区堀船2-17-1

印刷・製本

東京書籍印刷株式会社

東京都北区堀船1-23-31
